

マックス・ヴェーバーと「近代文化」

—『倫理』論文は何を問うのか (4)—

三笥 利幸ⁱ

ヴェーバーは、フランクリンに見られる「資本主義の「精神」」を「合理的」でかつ「非合理的」なものとして位置づける。この矛盾したあり方は、子孫への配慮だとか俗物的欲求だとかいった動機から説明できるものではない。「唯物史観」のように資本主義のみにその要因を求めるのも歴史的事実に反し、また、全面的な合理主義の進展という歴史把握も単純に過ぎる。そこでヴェーバーはその「精神的系譜」を問い、ルターの Beruf 概念に注目する。ルター訳聖書における「職業 Beruf」は、世俗の職業による利潤追求の肯定という意味で紹介され、ルターの意義はその点だけに限られてしまい、資本主義の発展はルターではなくカルヴァンを待たねばならないとされることがしばしばである。しかし、ルターの意義は、世俗の職業を神から与えられた「使命」とし、その遂行を道徳的最高善としたことであり、これが「プロテスタントのあらゆる教派の中心的教義」となったところにある。ここに、救済追求は世俗外から世俗内へと「転轍」されたといえる。

キーワード：ヴェーバー、『倫理』論文、プロテスタンティズム、フランクリン、資本主義の「精神」、職業義務、資本主義文化、唯物史観、ゾンバルト、合理主義、ルター、職業、ベルーフ、カルヴァン

目次

はじめに

1. 『倫理』の問題設定に対する誤解

1-1. 誤解の流布

1-2. 『倫理』初版への誤解、批判、反批判、そして『倫理』改訂 (以上第55巻第2号)

2. 『倫理』第1章第1節の論理構成

2-1. 信仰と社会層分化への注目

2-2. 経済を原因とする「一般解放説」

2-3. 教育によって得られる精神的特性への注目

2-4. 外的状況から形成される精神的特性——「過補償説」

2-5. 信仰の内面的特性についての漠然とした「社会通念」

2-6. 古プロテスタンティズムと資本主義文化の直接的な内面的親和関係の探索

(以上第55巻第3号)

3. 資本主義の「精神」——鍵概念の準備 (1)

3-1. 定義を拒む概念——「資本主義の「精神」」

3-2. 宗教的色彩を帯びたフランクリンという誤解

3-3. 大塚久雄によるフランクリンと宗教の連結

3-4. キュルンベルガー『アメリカにうんざりした男』に登場するフランクリン

3-5. 貨幣獲得と倫理の同時存在

(以上第55巻第4号)

3-6. 「職業義務」思想における「合理性」と「非合理性」の同時存在

3-6-1. 「職業義務」思想と諸動機——子孫への配慮および俗物的欲求

i 立命館大学産業社会学部教授

- 3-6-2. 「職業義務」思想と資本主義
- 3-6-3. 「職業義務」思想と合理主義
- 4. ルターの職業概念——鍵概念の準備 (2)
 - 4-1. ルターはカルヴァンの「露払い」なのか
 - 4-2. 「職業 Beruf」概念にこめられた〈新しい語義〉と〈新しい思想〉 (以上本号)
- 5. 『倫理』の問題設定とは
おわりに

3-6. 「職業義務」思想における「合理性」と「非合理性」の同時存在

3-5で示したように、フランクリンは「貨幣獲得」を自己目的としつつ「倫理的」でもあろうとする人物として描かれた。ここでしっかり気付いておかねばならないのは、このフランクリンという人物は、大塚が求めた倫理的の求道者にも、キュルンベルガーの小説に出てくる拝金主義者にも収まりきれない、きわめて奇妙な人物だということである。そしてその奇妙さは、「職業 Beruf」なかんずく「職業義務」思想に特に現れている。

営利は、人間の生活の目的としてあり、人間がその物質的生活を充足する目的のための手段とは位置づけられていない。これは、とらわれない感覚では、まったく無意味な、いってみれば「自然の」事態の倒錯 Umkehrung であるが、きわめて明白に無条件に資本主義にとってはライトモチーフであり、その息吹に触れない者には理解しえない fremd ものである。[MWGI/18: 160=大塚訳: 48]

本来、営利は人間が生きていくための手段であっても目的ではない。人間の生活上の物質的生活を満たす「自然の」事態からすれば、「幸福 Glück」や「快楽 Nutzen」を求めずただ職業を義務とすることは「自然」とは呼びえない奇妙な事態であり、「倒錯」である。ここにフランクリンの「非合理的」な姿を見ることができる。

他方で、「資本主義」へと観点を移動してみると、今度はフランクリンは「非合理的」で奇妙な存在ではなくなる。営利を人生の目的とするのは資本主義にとっては、まぎれもないライトモチーフなのであり、フランクリンは「合理的」な人物として立ち現れるのである。

このように、ヴェーバーはフランクリンの「職業義務」思想を「合理的」でかつ「非合理的」なものとして位置づける。そして、次のように述べる。

この思想は、資本主義文化の「社会倫理」に特徴的なものというより、ある意味、それ（資本主義文化——引用者）にとって構成的な意義 konstitutive Bedeutung をもっている。[MWGI/18: 161=大塚訳: 50]

「職業義務」思想は、「資本主義文化」の「構成的」要素であることに注意したい。というのも、「職業義務」思想は、資本主義以外の要因からも形成されて「資本主義文化」に刻印されたもので、それを歴史的に考察する必要があるからである [MWGI/18: 161=大塚訳: 50-1]。

少なくとも、「今日の資本主義的経済秩序」という「巨大なコスモス」は、人びとをいやおうなしに包摂していて、現代の資本主義的経済秩序こそが、人びとに「職業義務」思想への適合を要求し、その規範に沿う者と沿わない者を選別し淘汰していると見ることができる。すでに「鉄の外枠(殻)」と化した資本主義経済秩序は、一定の規範を要求し、それに適応しない者は「経済的淘汰」を受けて街頭に投げ出される。しかし、資本主義を歴史的にとらえようとしたとき、論理的に考えて、「資本主義の特性に適合した種類の生活態度や職業観念」は、今日の資本主義に先んじて成立していなければならない [MWGI/18: 162=大塚訳: 51]。というのも「淘汰」の基準となる規範が先に存在しているからこそ、その規範に適合するのかがどうかによって「淘汰」がなされるのであって、その逆ではないからである

[MWGI/18: 162=大塚訳: 51]。実際のところ、ベンジャミン・フランクリンの生地であるマサチューセッツでは、「資本主義の発達」より以前に「職業義務」思想を特徴とする「資本主義の精神」が存在していた[MWGI/18: 162=大塚訳: 52]。論理的にも、歴史的事実としても、資本主義が「職業義務」思想を生み出したと考えること——「職業義務」思想を「経済的状況の「反映」あるいは「上部構造」として生まれてくるというナイーブな唯物史観の考え」[MWGI/18: 162=大塚訳: 52]で説明すること——は誤りである。

では、どのようにしてこの「職業義務」思想は、生み出されたのか。この「理念」は、そう簡単に受け入れられるものではなく、歴史を見れば「敵対する諸力の世界と困難な闘いを貫徹しなければならなかった」[MWGI/18: 163=大塚訳: 53]。容易に受け入れがたかったはずの「職業義務」思想は、いかにして人びとに受け入れられたのか。ヴェーバーは手始めに、敵対する力をもはねのける可能性がある諸動機から考察していく。

3-6-1. 「職業義務」思想と諸動機——子孫への配慮および俗物的欲求

貨幣獲得の自己目的化という「非合理性」についてフランクリンに問えば、彼は聖書の句を挙げ、定言的、無条件的に職業を義務と語るのみである。それを、現代の「資本主義の「精神」」に満たされた人に問うたところで、その回答はフランクリンのそれと同型である。すなわち、彼らの回答は、ただ単に ganz einfach、「彼らにとって不断の労働を伴う事業が「生活に不可欠なもの」となっている」[MWGI/18: 192=大塚訳: 79]となるのである。

実際、これ（職業を義務として奔走することが生活に不可欠だという回答——引用者）こそ彼らの動機づけの唯一の的確な表現であるとともに、それは、個人の幸福という観点から見れば、事業のために人間が存在しその逆ではないという生活態度がまった

く非合理的だということを表している。[MWGI/18: 192=大塚訳: 79-80]

すでに聖書の句を引くこともないほど宗教とは無関係な現代人ではあるが、その回答はフランクリンのそれとまったく同型で、その「非合理性」の謎は解けない。そして、以下見ていくような想定をしても、結局はこの回答、つまり、その理由を知らず、答えようがないということが「唯一の的確な表現」なのである。

それでも、もし彼らがその理由を知っているというのなら、以下のような回答が予想される。

……もし彼らが答えを知っているとすれば、時に「子や孫への配慮」と答えることもあろう könnte。
[MWGI/18: 192=大塚訳: 79]

なるほど、自分のためではなく「子や孫のため」であれば、自分の幸福も快樂もかなぐり捨て、貨幣獲得を自己目的化し自分ではいっさい享受しないという態度をとるかもしれない。「子や孫のため」という理由は、この「非合理性」を受け入れるに十分であるように見える。しかし、「子や孫への配慮」という動機は、「あきらかに彼ら固有のものではなく、「伝統主義的」な人々にも同様に作用している」[MWGI/18: 192=大塚訳: 79]のである。「資本主義の「精神」」とは真逆の生活態度を示す「伝統主義的」な人びとにも、「子や孫への配慮」という動機が認められるのであれば、それは「資本主義の「精神」」に特有の「職業義務」意識の「非合理性」を説明する回答とはならない。「子や孫への配慮」は、「資本主義の「精神」」とは別次元の動機である。

さらに、もっと別の理由を想定することも可能だろう。それは、「権力や名声」を得たいという感覚である。

もちろん selbstverständlich, その場合、財産所有という事実それ自体が与える権力や名声への感覚も働

くこともある。[MWGI/18: 192=大塚訳: 80]

書き出しが「もちろん」であることから予想されるように、このあとには「しかし aber」で始まる一文が続く [MWGI/18: 193=大塚訳: 80]。ヴェーバーは、こんなことを理由に挙げるのは要するに俗物にほかならないと述べている。すなわち、「アメリカのように全国民の幻想 Phantasie がただ量的に大きいものに向いているところ」では、「数字のロマンティズム Zahlenromantik が抗し難い呪力 Zauber で商人のなかの「詩人 Dichter」に作用し」ていて、こうした俗物的な欲望を駆りたてている [MWGI/18: 192-3=大塚訳: 80]。アメリカ以外に目を向けても、そうした俗物は、「本来指導的な企業家やとりわけ持続的に繁栄している企業家ではない」 [MWGI/18: 193=大塚訳: 80]。要するにこうした俗物たちは、職業それ自体を義務だと意識していないのである。「ドイツの成り上がりの資本家家族」のような「亜流の頹廢的産物」とは違い、「資本主義の「精神」」の持ち主は、「こうしたより粗野で、あるいは、より上品な思い上がりとは無縁であ」って、むしろ、「虚勢をはることも、不必要な消費も、自分の権力をわざとふるうことも避けるし、自分の得ている社会的名声に対して外的な評価をうけることを心地よく思わず避ける」 [MWGI/18: 193=大塚訳: 80] ののである。

彼（上述のような「資本主義の「精神」」を持つ企業家——引用者）は、自分の財産のうち彼個人のためには「何も所有しない」——よき「職業の遂行」という非合理的な感情を除いて。[MWGI/18: 193-4=大塚訳: 80]

このように「職業義務」思想を特徴とする「資本主義の「精神」」は、「子や孫への配慮」、「権力や名声への感覚」などといった動機から受け入れられ、保持されるものではない。もとより、「職業義務」という意識は、こうしたばらばらの個々人の動機で

はなく、「人間集団 Menschengruppen」によって抱かれたものであるはずなのだ [MWGI/18: 162=大塚訳: 52]。そうであれば、そうした意識を抱くようになった別の説明が必要となろう。

3-6-2. 「職業義務」思想と資本主義

貨幣獲得の自己目的化は、「資本主義以前の人たち」にとっては「不可解で不可思議であり、不潔で軽蔑すべきものに見えた」 [MWGI/18: 194=大塚訳: 81] のであり、過去の「どの時代の道徳感覚にも背反する」 [MWGI/18: 195=大塚訳: 83] ような「非合理的」なものだった。ところが、現代の資本主義経済秩序では、貨幣獲得が要求され、それに適合し、経済的生存競争のなかを生き抜くための必須の条件となっている。すでに指摘したとおり、そうした現在から見ると、「資本主義の「精神」」は、「純粹に適應の産物として理解することもできそうである」 [MWGI/18: 194=大塚訳: 81-2]。

現代の資本主義経済秩序は、すでにひとつのコモス——「鉄の外枠（殻）」——となっていて、「職業義務」思想を要求する「世界観」のような後ろ盾を必要とはしていない。しかし、こうした思想が、かつては徹底的に嫌悪され忌避されたものであったことを思えば、それが受け入れられるには、何らかの力が働いたと想定せざるを得ないだろう。『倫理』冒頭から示唆しているように、この何らかの力は、「職業義務」思想を強く支える「世界観」をもつ宗教的力ではないか。

かつて近代資本主義は、形成期の近代的国家権力と結びついて、中世的経済規制の古い諸形態を破碎したが、——とりあえずこういっておこう——同じ事態が、近代資本主義と宗教的な力との関係についてもあてはまる〔=近代資本主義が宗教的な力と結びついて貨殖者的な態度に敵対する道徳感覚を破碎した〕のかもしれない。それが本当に起こったのか、また実際にどんな意味においてなのか、このことがともかくここで検証されなければならない。なぜな

ら、貨幣獲得を人間に義務づけられた自己目的、すなわち「職業 Beruf」とするあの見解が、どの時代の道徳感覚にも背反するということは、ほとんど証明が不要だからである。[MWGI/18: 195=大塚訳: 82-3]⁴⁸⁾

資本主義は、「ナイーヴな唯物史観の考え」[MWGI/18: 162=大塚訳: 52] が想定するように、その内的な機制によってのみ拡大-発展を遂げるわけではない。歴史を見れば、資本主義経済がその中世的経済規制を打破するために、形成期の近代的国家権力という経済以外の力を必要とした⁴⁹⁾。そうであれば、当時、貨殖者の態度を嫌悪し忌避した宗教的-道徳的感覚を破砕するには、資本主義以外の、「宗教的力」がそこに作用したと考えなければならないのではないか。資本主義の発展が見られた14、5世紀のフィレンツェで、依然として利潤追求は道徳的に敵視されていたにもかかわらず、資本主義発展が見られなかった18世紀のペンシルヴァニアで、この道徳感覚は破砕され、利潤追求が賞賛されるにとどまらず、義務とまでされた [MWGI/18: 205=大塚訳: 85]。この事実は、その想定を端的に裏付けるものである⁵⁰⁾。だから、ヴェーバーは「職業義務」思想は「どのような思想世界に由来するのだろうか」[MWGI/18: 205=大塚訳: 85] と問うのである。

3-6-3. 「職業義務」思想と合理主義

ヴェーバーは、再度現代の資本主義に目を向け、「資本主義の「精神」」の由来について、最後に経済的合理主義を考察対象とする。ヴェーバーはゾンバルトを念頭に置きながら、現代の資本主義に特徴的な「経済的合理主義」に注目して、「職業義務」意識あるいは「資本主義の「精神」」を「合理主義」の展開として説明する可能性を検討する。

近代経済の基調 Grundmotiv として認められる「経済的合理主義」が、生産過程を科学的観点から再編成し、人間を「自然な「有機的」限界から解放し」て、「労働生産性を増大」させることをいうので

あれば、それはそのとおりだとヴェーバーはいう [MWGI/18: 205-6=大塚訳: 91]。これは、まず大づかみには、機械的-技術的な革新によって、それまでとは比較にならないほどの大量生産が可能となった、というくらいの意味なのだろう。この「経済的合理主義」については、ゾンバルトの議論を参照すべきとされているが [MWGI/18: 205-6=大塚訳: 91]、具体的な参照箇所は示されていない。そこで、関連すると思われるところを以下に紹介しておきたい。

ゾンバルトは『近代資本主義』初版において、資本主義を以下のように規定する。

われわれは資本主義 Kapitalismus を、その特殊な経済形態 Wirtschaftsform が資本主義的企業であるような経済様式 Wirtschaftsweise であるものをいう。

[Sombart 1902: 195]

ゾンバルトは資本主義的企業に注目し、そのメルクマールをまずは「目的設定の独自性」に見ている [Sombart 1902: 195]。資本主義的企業の目的は、「経済的主体である生身の個人的人格から引き離され」、さらに「目的自体の抽象性とそれゆえに無限性が資本主義的企業の決定的メルクマールとしてまず表現される」[Sombart 1902: 195-6]。経済活動の目的が、人格から分離され、抽象化して無限化されたなかで、「資本の価値増殖」が行われる。それはやがて「強制力をもって押しつけられた客観的必然」となるとまでゾンバルトはいう [Sombart 1902: 196-7]。以上のようなゾンバルトの議論を、田村信一は以下のように手際よくまとめている。

資本主義においては、経済生活の目的=営利が経済主体の人格から分離し、企業組織そのものに体现化され(抽象化)、利潤獲得・営利衝動が経済主体に対して強制的に課せられ(客体化)、しかもそれは人格から分離されて目的自体となっているために、限度がない(無限化)のである。[田村 1996-7=

2018: 209]

こうしたゾンバルトの「資本主義」の見解を参照すれば、ヴェーバーのいう「経済的合理主義」は、以下のようなものと考えられる⁵¹⁾。「利潤追求」は「個人」から引き離され、「自然な「有機的」限界」から解放されて「客体化」される。ここに「労働生産性の増大」が「無限化」されていくが、このプロセスを「合理化」と見れば、人間の限界を超え、「自然」から見れば「倒錯した」目的——人間の自然なあり方からすれば「非合理的」な目的——を抱くことこそが何より「合理的」なものとなっていくといえる。単純化すれば、「数値」の無限の増大が可能となり、それを目指すことが「合理的」になるのである。「資本主義の「精神」」の抱懐者であったフランクリンの念頭にも「経済的合理主義」がしっかり存在したことは、彼がフィラデルフィアで、多くの雇用を創出し、人口や商業の「数値」の増大という経済的「繁栄」を追求したことに満足し誇りをもったことからわかるのである [MWGI/18: 206=大塚訳: 92]。

そうであれば、政治、法、経済、経営、流通などのあらゆる面に「合理主義」が及び、その歴史的進展が資本主義に「経済的合理主義」をもたらし、人びとに無限の貨幣獲得という「職業義務」意識を醸成していったと考えられそうである。

あたかも「資本主義精神」の発展は、合理主義の全発展の部分現象として理解することがもっとも明白であるかのように見えるし、最終的な人生問題に対する合理主義の原理的立場から導き出されてしかるべきであるかのようにも見える。そうであれば、プロテスタンティズムは、純粋な合理主義的人生観の「早生果」という役割を演じたというかぎりでのみ歴史的な観察対象となるかのように思われるだろう。 [MWGI/18: 207=大塚訳: 92]

なるほど、貨殖者の態度を嫌悪する宗教的-道徳的

感覚を破砕したのは「宗教的力」ではなく、経済に内在する「合理主義」だと考えるなら、プロテスタンティズムは真正面から考察すべき対象ではなくなるだろう。しかし、ヴェーバーはこの直後で、「そういう単純な問題設定は不可能だ」 [MWGI/18: 207=大塚訳: 92] と続けるのである。

というのは、合理主義の歴史は決して個々の生活諸領域において並行した進歩発展を示すわけではないからである。 [MWGI/18: 207=大塚訳: 92-3]

「合理主義」「合理化」はすべての領域で、同程度に、同時に進んでいくわけでは決してない。経済的合理化の進展した国々では私法の合理化が最も遅れるいっぽう、古代ローマではすでに私法の合理化が極点に達していた。18世紀に合理主義哲学がさかんだったのは、資本主義が最高度に発達したところにかぎるものではなく、合理主義と資本主義の同時進行-並行関係を認めることはできない。キリスト教的世界観を批判するようなヴォルテール主義は、他ならぬローマン・カトリック諸国の広範な上・中間層に見られる。「実践的合理主義」は個人的自我の現世利益を重視する「自由意志 *liberum arbitrium*」を生み出したが、それから見れば「職業義務」思想はまったくもって非合理的である⁵²⁾。このように、合理主義は諸領域で同時並行的に、一様に進展するようなものではない。

生活はきわめてさまざまな究極的観点のもとに、非常にさまざまな方向に向かって「合理化される」のである——この単純な事実はしばしば忘れられているけれども、「合理化」に取り組むすべての研究の冒頭におかれるべきだろう。「合理主義」は一つの歴史的概念であり、そのなかに矛盾の世界を包含している生活は、きわめてさまざまな究極的観点のもとに、きわめてさまざまな方向に向かって「合理化」されるのであり…… [MWGI/18: 208=大塚訳: 93-4]⁵³⁾

だから、経済領域(資本主義)に合理化の進展が認められたところで、「究極的な人生問題」[MWGI/18: 207=大塚訳: 92]——幸福も快楽も捨てて無限の貨幣獲得に生きるという「非合理的」な生き方の選択——にも同じように合理化が進展していくわけではない。フランクリンのように「経済的合理主義」を念頭に活動していた人物が、他ならぬ「資本主義の「精神」」を抱いていたことを、「合理主義」の産物だと説明するわけにはいかないのである。「資本主義の「精神」」は、「合理主義」によって、単純に、整合的にとらえられるようなものではない。むしろ、「資本主義の「精神」」は、資本主義には「合理的」で人間の自然には「非合理的」であるという矛盾を抱え込んでいるものなのである。

整理しておこう。「資本主義の「精神」」は、子孫への配慮だとか俗物的欲求だとかいった動機から説明できるものではない。また、「唯物史観」のように資本主義のみにその要因を求める説明も歴史的事実に反するし、全面的な合理主義の進展などという歴史把握も単純に過ぎる。「資本主義の「精神」」は、これほど難物なのである⁵⁴⁾。

だからこそ、『倫理』第1章第2節を閉じるにあたり、ヴェーバーはこういうのである。

……われわれがまさに究明すべきことは、われわれの資本主義文化のもっとも特徴的な構成要素であったいまでもなおそうである「職業」思想と——すでに見たように、純粋に幸福主義的な利己的利害関心という観点から見れば非常に非合理的な——職業労働への献身とを生み出した、「合理的」な思考と生活の具体的な形態はどんな精神的系譜にあるのか、という問題でなければならない。ここでわれわれの関心を惹くのは、この「職業」概念のなかにあり、そしてどの「職業」概念にも同様に存在するものである、あの非合理的要素の由来なのである。[MWGI/18: 208=大塚訳: 94]

ここでヴェーバーが、「われわれの資本主義文化の

もっとも特徴的な構成要素」である「職業」思想と合理的思考および合理的生活は、「どんな精神的系譜にあるのか」、と問うとき、「われわれがまさに究明すべきこと」つまり『倫理』の問題設定は、ほぼその全貌を現している。ただ、ここですぐに『倫理』の問題設定を云々する前に、依然として「非合理的要素」を内包したという説明に留まっている「職業義務」意識の「由来」が『倫理』第1章第3節で論じられることになる。

4. ルターの職業概念——鍵概念の準備 (2)

今日のドイツ語の Beruf という語には、すでに、ある宗教的な「神から与えられた使命 Aufgabe」[MWGI/18: 209=大塚訳: 95] という意味が込められている。これは聖書原文ではなくルター訳聖書に由来するものである。『倫理』第1章第3節は、これを指摘するところから始まる。ここには長大な注——『倫理』初版の段階ですでにかなり大きなものだったが、改訂によってさらに膨れ上がった——が付けられて、ルター訳聖書における「職業 Beruf」の成立や語義に関する議論が展開されている[MWGI/18: 209-25=大塚訳: 96-109]。それに関しては折原浩による詳細な論究[折原 2005a: 161-216][折原 2005b: 110-44]があるが、折原の議論は語義論、つまり、『倫理』第1章第3節の冒頭が議論の中心となっていて⁵⁵⁾、『倫理』の問題設定を探るといふ本稿の関心にとって重要な点、つまり、ルターの「職業」概念にヴェーバーはいかなる意義を認めたのかという点については中心的に論じられていない⁵⁶⁾。本稿では、むしろここにこだわってみたいのである⁵⁷⁾。

4-1. ルターはカルヴァンの「露払い」なのか

『倫理』の解説がなされる時、ルターは世俗の職業に宗教的意味を持たせた Beruf 概念の創始者としてまずは位置づけられる。それは、「利潤追求を卑しいことと見な」していたキリスト教にあって、そ

れを「積極的な意味のある行為へと転換させるきっかけ」となったというものである〔仲正 2014: 30-1〕。そして、ルターの意義づけは、ここで終わってしまうこともまたしばしばである。利潤追求はそのやましきから解放されたが、ルターでは「資本主義的な貨幣の獲得や事業の拡張に結び付けるような新たな倫理を確立するには至らず、伝統主義化してしまっ、て、「資本主義の精神」を生み出すこともなく、資本主義発展には貢献しなかった〔仲正 2014: 33〕。「伝統のしがらみのブレークスルー」〔大澤 2019: 334〕を行って資本主義の発展へと貢献したのは、ルターではなくカルヴァンである。このような流れで、ルターにはカルヴァンの「露払い」的な位置づけがなされるのである。

たしかに、『倫理』でメインに論じられるのはカルヴィニズムをはじめとする禁欲的プロテスタンティズムであり、ルター派は禁欲的プロテスタンティズムにすら分類されていない⁵⁸⁾。ルターがカルヴァンの「露払い」にされたところで、それは一見したところ『倫理』の筋を大きく踏み外すようなものではないようである。社会(科)学の教科書のようなものでは、紙幅の関係もあって『倫理』におけるルターの位置づけはほぼなされず、また、ヴェーバーの解説書ですら、ルターは素通りされるか上に概略を紹介したようにカルヴァンの前座どまりである。しかし、ほんとうにヴェーバーはルターにそうした位置づけをしているのだろうか。

4-2. 「職業 Beruf」概念にこめられた〈新しい語義〉と〈新しい思想〉

『倫理』第1章第3節の冒頭第1段落を、その巨大で詳細な注に目を奪われず読み直してみたい。すると、ヴェーバーはきわめて明確に、単純な指摘をしていることに気が付く。プロテスタントにとって Beruf という語には、世俗の職業とともに宗教的な「神から与えられた使命 Aufgabe」という意味がある。そして、その語義はルターの聖書翻訳に由来する。ヴェーバーの指摘はこれに尽きる。

読み間違っってはならないのは、「職業 Beruf」には、神による「使命」という意味が付与されたところである。これは、「神の御心による勤労の勧め」〔仲正 2014: 33〕などではないし、利潤追求の許可でもない。資本主義発展への寄与というところからルターを評価すると、そう見たくなるのだろうが、ヴェーバーは明確に、ゲシュペルト表記で「使命」と述べている。

ここは、『倫理』第1章第2節で謎のまま残された「職業義務」思想の「非合理性」の思想系譜を探るための、まず最初に見ておくべきポイントなのである。人間の自然から見れば「非合理的」でしかない、無条件的、定言的な「職業義務」思想は、「職業」が神という超越的存在によって「使命」として与えられたという系譜につながるのではないか。もっといえば、フランクリン見られた「貨幣増殖と倫理の希有の癒着」〔折原 2005a: 285〕は、宗教を介してとらえられるのではないか。こういう探求の端緒が書かれている。

ヴェーバーは、続いて、語義 Wortdeutung とともにルターが生み出した〈新しい思想 Denken〉について述べている。この〈新しい思想〉とは、いったいどういふものか。

ともかく、まず次のことは無条件に新しいものである。すなわち、世俗的職業の内部における義務の履行を道徳的実践の最高の内容として重要視したことである。これこそが、その不可避の結果として、世俗的日常労働に宗教的意義を認める思想を生み、その意味での職業概念を最初に生み出したのだ。この「職業」という概念には、プロテスタントのあらゆる教派の中心的教義が表されている。それは、カトリック的にキリスト教の道德戒を「命令 praecepta」と「勸告 consilia」とに分けることを拒否し、修道士的禁欲で世俗内的道德を凌駕するのではなく、各人の生活上の地位から生まれ、それゆえその人の「職業」となる世俗内的義務の遂行だけが、神によるこばれるように生きる唯一の手段だと考えるものだった

た。[MWGI/18: 226=大塚訳: 109-10]⁵⁹⁾

ヴェーバーは、ここに引用した職業思想が「プロテスタントのあらゆる教派の中心的教義」だといっている。その「中心的教義」は、道徳的実践のあり方をカトリックから大きく変えるものである。カトリックでは、「命令」と「勧告」を区別して、後者を特に追求する修道士の禁欲のあり方を高く評価した。ルターはこのあり方に対して、「修道士の生活態度は、神に義とされるためにまったく無価値というだけでなく、世俗の義務から逃れようとする利己的な愛の欠如の産物である」[MWGI/18: 229-30=大塚訳: 110]とまで批判している。隣人愛の実践は世俗の職業労働でこそなされるべきものなのである。このスコラ的な労働の位置づけは後に後景に退くとはいえ、ルターは「あらゆる状況でも神に喜ばれる唯一の道は世俗内的義務の遂行」であり、世俗の職業はどんな職業であっても神の前では等価であることを強調した[MWGI/18: 231=大塚訳: 111]。

世俗内的職業生活にこうした倫理的性格づけをしたことが、宗教改革の、それゆえ特にルターのなした最も重大な成果のひとつであるということは、実際、疑いなく、まさに常套句 Gemeinplatz となっているといつてよい。[MWGI/18: 232-3=大塚訳: 114]

以上のように、ルターの「新しさ」は、世俗の職業を神から与えられた「使命」とし、その遂行を道徳的最高善としたことであった。これが「プロテスタントのあらゆる教派の中心的教義」となったのであり、救済追求は世俗外から世俗内へと「転轍」されたのである。ヴェーバーがルターに「実践的意義」を認めるのは、まさにここなのだが、それでも、その「実践的意義」は、「あきらかに、ルターおよびルター派教会の世俗的職業に対する姿勢からは直接的に導き出すことはできない」とも述べている[MWGI/18: 249=大塚訳: 128]。というのも、ルターが示した上述の職業思想は、後に変化していくか

らである。それについては、節をあらためて考察しよう。

(以下続く)

凡例

ヴェーバーからの引用は、『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*を底本とする。略号は『全集』とし、参照ページを記載する際の略号としてMWGを使い、そのあとにAbteilungをローマ数字で、Bandを算用数字で示す。

『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)

MWGI/9: *Asketischer Protestantismus und Kapitalismus, Schriften und Reden 1904-1911*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2014 [— Die protestantische Ethik und „Geist“ des Kapitalismus=1994 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未來社、『倫理』初版と略記、また、訳本については梶山訳・安藤編と表記]

MWGI/18: *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2016 [— Vorbemerkung=1972 大塚久雄・生松敬三訳「宗教社会学論集 序言」『宗教社会学論選』みすず書房、『序言』と略記、また訳本については大塚・生松訳と表記、— Die protestantische Ethik und Geist des Kapitalismus=1989 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、『倫理』初版との差異を示す際には『倫理』改訂版と略記、また、訳本については大塚訳と表記]

MWGI/22-1: *Gemeinschaften* / Max Weber ; herausgegeben von Wolfgang J. Mommsen ; in Zusammenarbeit mit Michael Meyer [—

Wirtschaftliche Beziehungen der Gemeinschaften im allgemeinen = 1979 厚東洋輔訳「経済と社会集団」『世界の名著 61 ウェーバー』中央公論社、訳本については厚東訳と表記]

MWGI/22-2: *Religiöse Gemeinschaften*, herausgegeben von Hans G. Kippenberg in Zusammenarbeit mit Petra Schilm unter Mitwirkung von Jutta Niemeier, 2001 [— Religiöse Gemeinschaften = 1976 武藤一雄・藪田宗人・藪田坦訳『宗教社会学』創文社、訳本については武藤他訳と表記]

MWGI/22-4: *Herrschaft*, herausgegeben von Edith Hanke in Zusammenarbeit mit Thomas Kroll [— Herrschaft = 1960-2 世良晃志郎訳『支配の社会学 I / II』創文社、訳本については世良訳と表記]

なお、この本稿(4)では、『倫理』について、以下の日本語訳にも言及している。それぞれ、梶山・大塚訳、中山訳、コールバーグ訳と略記する。

梶山力・大塚久雄訳 1955-62 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上・下』岩波書店
中山元訳 2010 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』日経 BP 社

Kalberg, Stephen, tr. 2002, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, Third Edition, Los Angeles, Roxbury Publishing Company, 2002.

注

48) この箇所の解釈については、荒川敏彦、折原浩、中野敏男の三氏から様々教示いただいた。記して感謝したい。なお、この箇所については、いくつも論じるべきことがあるが、私が亀甲括弧で補った内容に関わる点についてのみ手短かに補足しておく。

次の注49でも指摘するように、この箇所では、近代資本主義と形成期の近代的国家権力との関係について具体的な議論は明示されることはないまま、近代資本主義と宗教的力との関係について「同じ事態 *das gleiche*」を類推するよう求められている。そもそも確定的に意味を取ることが困難なところではあるが、しかし、少なくとも、近代資本主義が宗教的な力と結びついて破砕したのは、

貨殖者的な態度に敵対する道德感覚であって、「中世的経済規制の古い諸形態」ではないだろう。しかし、以下に引用するように、コールバーグによる英訳では、そうした解釈が示されている。

Capitalism, it will be remembered, managed to burst asunder in the late Middle Ages the old [feudal] forms of economic regulation only in alliance with the developing power of the modern state. We wish here to argue, in a preliminary fashion, that capitalism's relationship to the religious powers could have been exactly parallel, namely, a coalition between capitalism and religious belief tended to burst asunder the old economic traditionalism. It should be investigated here whether, and in what way, just this was the situation.

Surely it scarcely needs to be proven that the spirit of capitalism's comprehension of the acquisition of money as a "calling"-as an end in itself that persons were obligated to pursue stood in opposition to the moral sensitivities of entire epochs in the past. [Kalberg 2002: 32-3] (段落はコールバーグがつけたもの、また、アンダーラインは引用者)

この箇所の前後でヴェーバーが問題としているのは、「職業義務」思想であり、それが近代資本主義以前の人びとにとっては恐ろしく異質で排除すべきものと思われていたということである。また、資本主義が発達したところでも、敵対する道德感覚はなくならなかったという指摘もある。「中世的経済規制の諸形態」についての言及——これを「伝統主義」とイコールで考えているのかもしれないが、それは注49に示した内容を考えても、かなりの飛躍だろう——は見当たらない。やはり、宗教的力が破砕したのは、当時の道德感覚と考えるのが文脈から考えて素直だし、何より、コールバーグの解釈でいくと、「職業義務」思想を徹底して嫌悪した道德感覚がいったい何によって打破されたのかわからないまま放置されることになる。

49) 前注とも関わるが、近代資本主義と形成期の近

代的国家権力との関係が具体的に何を指すのか、ここでは特定できない。そこで、『経済と社会』旧稿の「ゲメインシャフトの経済的關係一般」を参照してみよう。そこでヴェーバーは「近代初頭に「重商主義 Merkantilismus」が特殊な性格を持ち、特殊な作用をした」[MWGI/22-1: 106=厚東訳: 552] ことに注目する。「重商主義」は「国家形象権力」の内部で動産を保護、育成することで「国家形象権力と要求され特権付けられた資本力との間に重要な結合」をもたらし、「近代資本主義の発展にとって重要な産科医」の役割を果たしたと位置づけている [MWGI/22-1: 106=厚東訳: 552]。同様の記述は、『経済と社会』旧稿の『支配の社会学』にもある [MWGI/22-4: 443=世良訳: 384]。こうしたことが、近代資本主義と形成期の近代的国家権力との関係についての具体的な内容ではないかと推測される。そう考えれば、『倫理』第2章で「たしかに、国家の重商主義的統制が産業を育成することはできたが、しかし、少なくともそれだけでは資本主義「精神」を育成できなかった」[MWGI/18: 408=大塚訳: 285] という行は、この箇所に対応する内容として読むことができるだろう。なお、ヴェーバーのいう「重商主義」については、折原の整理 [折原 1996: 197-200] [折原 2014: 87-8] を参照。

- 50) ヴェーバーは、別の箇所でも、ベンジャミン・フランクリンの生地であるマサチューセッツでは、「資本主義精神」は「資本主義の発達」より以前に *vor* 間違いなく存在していたのであり、「因果関係は「唯物論」の立場から前提されるものとはともかく逆になっている」[MWGI/18: 162-3=大塚訳: 52] のである、と述べていた。
- 51) 「経済的合理主義」を取り上げる際に、ヴェーバーは、ゾンバルトの名前は出すものの、彼の著作の直接的な参照指示はしない。それは、ゾンバルトが実際に『近代資本主義』初版で論じていることそのものと、ヴェーバーが「経済的合理主義」という概念に託していることが、必ずしも一致しないからではないかと思われる。本文で紹介した、ヴェーバーの議論に沿うと思われる箇所は、ゾンバルトが「経済的合理主義」ではなく「資本主義」概念について論じているところであ

った。ゾンバルト自身は、「経済的合理主義」なる概念を、「特殊な資本主義精神 *der spezifisch kapitalistische Geist*」が、「われわれが資本主義的企業家に特有なものと認識している心的気分、すなわち、「利潤追求」「計算感覚」そして「経済的合理主義」である」と述べるところで使っている [Sombart 1902: 208]。詳細は、田村の分析 [田村 1996-7=2018: 209-13] を参照。

- 52) この段落はひとつひとつ引用注をつけていないが、すべて [MWGI/18: 207-8=大塚訳: 93] に依拠している。
- 53) 『倫理』の問題設定において要となる「合理化」「合理主義」概念を誤解して批判したひとりが、ブレンターノだった。ヴェーバーが『倫理』改訂に際して付けた注では、ヴェーバーなりにブレンターノの批判内容をまとめて紹介している [MWGI/18: 159=大塚訳: 49-50] が、以下では、ブレンターノのもともとの批判に遡ってみよう。

ブレンターノは、以下のように述べている。すなわち、フランクリンが「最高善」とした禁欲的な貨幣獲得への邁進は、「個々人の「幸福」や「利益」」に対して「非合理的」だとヴェーバーはいうにもかかわらず、カルヴィニズムが「貨幣の追求、そしてさらに多くの貨幣の追求へと人間を教育すること」は、「非合理的」な本能の克服」だといっている [Brentano 1916: 127]。単純化すれば、同じ貨幣獲得への邁進であっても、フランクリンは「非合理的」だといい、カルヴァン派信徒なら「合理的」だとヴェーバーはいついて、これはあきらかに「矛盾 *Widerspruch*」 [Brentano 1916: 127] だと指弾しているわけである。

ブレンターノは、ひとつの対象については、必ず一義的に合理的であるか非合理的であるかが決定されるものだと思込んでいる。ここに「観点」という発想は見当たらない。だからこそ、ヴェーバーは「非合理的」なのはそれ自身がそうだということではなく、ある特定の「合理的」な観点から見ればそうなのである [MWGI/18: 159=大塚訳: 50] といい、次のように端的にいうのである。

この論考が何か寄与できる場所があれば、

「合理的」という見かけ上一義的な概念に多様性があることをあきらかにすることでありたい。
[MWGI/18: 159=大塚訳: 50]

このことは、たとえば『宗教社会学論集』の「序言」でも「ある観点から「合理的」であることが、他の観点から見ると「非合理的」でありうる」[MWGI/18: 116=序言: 22]と繰り返されている。なお、こうしたヴェーバーの合理主義の「多方向的」あり方については、矢野善郎の解説を参照[矢野 2003: 28-36]。

- 54) 「資本主義の「精神」」の捉えがたさを見逃し、資本主義を発展させるものだとばかり思い込むと、その「非合理性」について意識が向かなくなり、「資本主義発展の原動力」[仲正 2014: 30]としてのみとらえられてしまうようである。橋本は、「資本主義の「精神」」についてあらん限りの誤読と曲解を重ね、それには「四つのタイプ」があり、それがまた「広義」や「狭義」があるなど[橋本 2019: 91-101]、荒唐無稽も極まった議論をしている。
- 55) 折原 2005b の第 5 章の表題は「『倫理』第一章第三節「ルターの職業観」第一段落と三注を読む——ルターによる「ベルフ」語義創始の経緯と「意味-因果連関」の手順（例解）」となっている。明示されているとおり、ここで折原は冒頭の語義論に限定して議論している。
- 56) 折原は「職業 Beruf」の語義論が、「トボス」として論じられるにとどまるものであり、『倫理』ではルターの職業思想の「文化意義」と（歴史的）限界」こそが論じられると、的確な指摘を行っている[折原 2005b: 110-2]。本稿では、まさにこうした点に立ち入りたいのである。
- 57) 本稿では語義論には踏み込まないが、ここで Beruf の訳語についてだけは、簡単に触れておきたい。

ドイツ語の Beruf を日本語に訳す場合、単純に「職業」とするだけでは、その意味するところが十全に伝わらないことがある。しかし、私は、基本的に訳語は「職業」とし、何らかの説明が必要な場合には適宜補うことにして、「職業」ではなく「天職」といった訳語を使用したり、これらを

併用したりはしない。

日本語初訳の梶山訳『倫理』は、その本文が完訳されたものの注の「一部の省略」[梶山 1938=1994: 15]があった。この事情は安藤 1996 に詳しい。のちに大塚久雄がこの訳の抜けを補い、訳文を整えた、梶山・大塚訳が登場し、岩波文庫に収録された（上巻が1955年、下巻が1962年に刊行）。梶山・大塚訳は長らく『倫理』の定番訳として利用されたが、1988年になると大塚は単独訳を発表し、翌1989年にはそれが梶山・大塚訳に替わって岩波文庫の一冊に取められることとなった。この大塚訳になって、それまで「職業」と訳された箇所が多く「天職」に改められた。大塚曰く、「できるだけ誤解を防ぐため」という配慮である[大塚 1989: 398]。この影響もあって、最近の新書、解説書あるいは専門性の高い論文でも「天職」という訳語を多く見かける。もちろん、「職業」と「天職」を使い分け、宗教的意味合いが認められる場合に「天職」という訳語をあてるという慎重な使用も見られはする。しかし、私は、上述のような訳し分けをせず、「天職」なる訳語は使用しない。それは、「天職」という語の響きは、たとえば「その人の天性に最も合った職業」(『広辞苑』より、傍点は引用者)などという定義からもうかがえるように、その人にとって唯一の職業を意味してしまうからである。ヴェーバーは以下のようにいっている。

ピューリタニズムの職業理念において、つねに重点がおかれたのは、職業における禁欲的方法的性格であって、ルターのように、神がひとたび与えた運命に甘んじることはなかった。したがって、ひとがいくつもの職業を兼ね営んでもよいかという問いには——それが公共の福祉ないし自分自身の福祉に役立ち、他の誰にも害を与えず、兼営する職業のどれにも不誠実(unfaithful)にならなければ、無条件に肯定された。それだけでなく、職業の変更も、それが軽率ではなく、神により喜ばれるような、つまり一般の原則に合った、より有益な職業を選ぶのであれば、決してそれ自身排除すべきものとは考えられない。[MWGI/18: 431-2=大塚

訳: 309-10]

見られるように、禁欲的プロテスタンティズムにおいて Beruf は「兼職」も「転職」も、神に喜ばれるかぎり許されるものであり、Beruf は唯一の職業ではない。Beruf 概念の最重要のポイントは、神によって与えられた「使命 Aufgabe」ということであり、それが唯一であったり固定的であったりすることではない。「ピューリタニズムの職業観は、職業選択の自由と両立するのである。」[仲正 2014: 59] という正しい指摘もあるいっぽう、「一つの職業労働に専念する」[橋本 2019: 178] ことだという誤解も存在している。私が「職業」という訳語のみを使用する理由のひとつはここにある。

- 58) ヴェーバーは、イギリス国教会とともにルター派を「(私のいう意味で) 非「禁欲的」古プロテスタンティズム」[MWGI/9: 581] としている。また、たとえば、端的な区分として、『宗教社会学』草稿では以下のように述べている。

プロテスタンティズムの禁欲的傾向 (カルヴァン派、洗礼派、メノナイト、クエーカー、改革派的敬虔派、メソヂスト派) [MWGI/22-2: 302-3 = 武藤他訳: 190]

そして、後で論じることに関わるが、これらに共通しているのは、救いの「確証 Bewährung」であることもここに記されている [MWGI/22-2: 303 = 武藤他訳: 190]。

- 59) 引用中の「命令 praecepta」と「勧告 consilia」という二つのキリスト教用語は、『倫理』を理解する上できわめて重要である。

これらは、梶山訳、梶山・大塚訳、大塚訳すべてにおいて、原語は補われているがその意味にかんする訳注などはない。私も学生時代に梶山・大塚訳で『倫理』を読んだとき、この区別が分からず、折原の端的で明確な解説 [折原 1981: 120-1] ——「命令」とは、⁶モーセの十戒、を中心とする日常的戒律で、平信徒大衆をも拘束するのに対して、「勧告」とは、イエスの説く清貧、貞潔、従順の三つで、修道士にのみ適用される——を読んで

初めて理解できたことを覚えている。初学者やキリスト教用語になじみのない者にとっては、訳本だけでは意味がわからないままになるのである。そうした訳書の状況を知ってだろうか、中山訳ではこの箇所には訳注がつけられた。しかし、そこには「勧告は (命令より——引用者) もっと緩いものだった。」[中山訳: 509] などと、そもそも意味不明で誤った解説がなされている。中山訳を「分かりやすい」が「誤りもある」という橋本 [橋本 2019: 25] は、この誤った訳注をそのまま踏襲して [橋本 2019: 308]、この箇所の意味がまったく理解できていない。また、仲正 2014 のようにひとまずは正しく両概念の解説していても [仲正 2014: 32]、結局はルターをカルヴァンの「露払い」にしてしまうなど、この箇所の理解がなかなか進んでいないのが現状である。

これらが重要な概念であることは『マックス・ヴェーバー全集』編者も十分に理解していて、以下のような編者注を付けている。

ローマ・カトリックの倫理神学によれば、福音的勧告 *consilia evangeica* („evangelische Räte“ すなわち、清貧、貞潔、従順) では修道士への指示 *Weisung* が問題となるのに対して、一般信徒 *Laien* にとっては、日常生活でしたがうべき命令 *praecepta* (慣習的の命令および禁止) が効力を持った [MWGI/18: 226]。

なお、この「命令」と「勧告」は、前掲の折原の解説の他、世良晃志郎訳『支配の社会学』の世良による訳注 (同書550-1ページ) に、以下のようなきわめて適切な解説がある。

カトリック教会は「掟 (命令) のこと——引用者」と「福音的勧告」とを区別する。前者は原則としてすべての信徒を拘束する教会の規則であり、後者は「完徳」への道として福音書に示された三つの勧告——清貧・貞潔・従順——を意味し、特に選ばれた者のみを拘束する。特に修道士は、その修道誓願によって、この勧告の遵守を義務づけられており、「福音的勧告」というとき直ちに連想させるのは修道士の生活で

ある。ウェーバーは、プロテスタンティズムにおいてこの「掟」と「福音的勧告」との区別が排除され、「禁欲」が現世的「職業」に転化したことを随所に強調している。

文献

- 安藤英治 1994 「编者あとがき」 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社所収
- 大澤真幸 2019 『社会学史』講談社
- 折原浩 1981 『デュルケームとウェーバー 上』三一書房
- 折原浩 1996 『ヴェーバー『経済と社会』の再構成——トルソの頭』東京大学出版会
- 折原浩 2003 『ヴェーバー学のすすめ』未来社
- 折原浩 2005a 『学問の未来——ヴェーバー学における末人跳梁批判』未来社
- 折原浩 2005b 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』未来社
- 折原浩 2014 『日独ヴェーバー論争——『経済と社会』(旧稿)全篇の読解による比較歴史社会学の再構築に向けて』未来社
- 梶山力 1938=1994 「訳者序文」 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社所収
- 仲正昌樹 2014 『マックス・ウェーバーを読む』講

談社

- 田村信一 1996 「近代資本主義論の生成 (一)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について」『北星論集』第33号 → 田村 2018
- 田村信一 1997 「近代資本主義論の生成 (二)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について」『北星論集』第34号 → 田村 2018
- 田村信一 2018 『ドイツ歴史学派の研究』日本経済評論社
- 橋本努 2019 『解説 ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』講談社
- 三笠利幸 2010 「書評 マックス・ヴェーバー著 中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(日経BPクラシックス, 2010年)」『社会文化研究所紀要』第66巻
- 矢野善郎 2003 『マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義』創文社
- Brentano, Lujo, 1916, *Die Anfänge des modernen Kapitalismus: Festrede gehalten in der öffentlichen Sitzung der K.Akademie der Wissenschaften am 15.März 1913*, München, K.B.Akaedemieder Wissenschaften. (=1941 田中善次郎訳『近世資本主義の起源』有斐閣)
- Sombart, Werner, 1902, *Der moderne Kapitalismus, 1.Aufl., Band 1: Die Genesis des Kapitalismus, Band 2: Die Theorie der kapitalistischen Entwicklung*, Leipzig, Duncker & Humblot.

Max Weber and “Modern Culture” :
The Research Question of His Protestant Ethic Article (4)

MITOMA Toshiyukiⁱ

Abstract : Max Weber regarded ‘the Spirit of Capitalism,’ shown by the ideal type of Benjamin Franklin, as both ‘rational’ and ‘irrational.’ This inconsistency does not arise from consideration of their descendants nor snobbism. Capitalism, which ‘Materialism’ considers seriously, is not the only reason for this contradiction. Neither can it be explained as phenomena of Rationalism. So Weber examined its ‘ancestral lineage’ and Martin Luther’s conception of Beruf (calling).

Luther’s ‘calling’ is usually thought as simply permission to pursue profit. So Jean Calvin, not Luther, contributed to development of capitalism. But Luther legitimated this-worldly work as a ‘task’ of God and assumed fulfillment of duty in vocational callings to be the highest moral activity. The concept of ‘calling’ expresses the central dogma of all Protestant denominations. Weber pointed out that Luther denied Catholic evangelical councils of monks and friary and claimed salvation through the this-worldly work of each individual believer.

Keywords : Weber, Protestant Ethic article, Protestantism, Franklin, Spirit of Capitalism, the culture of capitalism, Materialism, Sombart, rationalism, Luther, calling, Beruf, Calvin

i Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University